

令和3年度新城設楽地域産業労働会議における主な発言要旨

日時 2021年1月19日(金)

午後2時から午後4時まで

場所 新城設楽振興事務所 第1会議室

(コロナが地域の雇用に及ぼす影響)

- ・企業側に支給される雇用調整助成金や労働者に支給される休業支援金によって、雇用維持が図られたことにより、リーマンショック時のような労働者がハローワークの窓口押し寄せるといったような状況は発生しなかった。むしろ緊急事態宣言による外出自粛要請もあってハローワークの窓口は平常と変わらない状況が続いていた。
- ・企業倒産や廃業といった声はほとんど聞かれず、むしろ後継者不足による事業承継や従業員の欠員補充の問題、少子高齢化・人口流出といったこの地域独特の課題、建設・介護といった人手不足分野への充足対策、管内求職者の高齢化による高齢者対策が喫緊の課題となっている。

(コロナへの対応<民間側>)

- ・コロナ禍においても、Webを活用することで、緊急事態宣言下でも打ち合わせができるといった良い面がある一方で、時間帯の制約がない、労働時間が正確にカウントされているかなどの問題が生じている。そして一番大きいのがセキュリティの問題である。
- ・中小企業であり、セキュリティの問題もあり、テレワークは実施していない。コロナ禍で伸びた優良従業員表彰等の1年延期やワクチン接種、副反応に備えた特別有給休暇の取得を、会社側と交渉してきた。
- ・アフターコロナを見据え、国の補助金を活用してネット販売を始めた商店において、販売している商品がテレビで取り上げられ、大量注文が来たという例があった。

(コロナへの対応<公的機関側>)

- ・コロナ対策を施した事業所に対しては、協力金という形で支援してきた。今年度は、感染対策の設備・機器に要した費用を、補助金という形で遡って支援することとした。
- ・今年度、事業者が意欲的に取り組むステップアップに対して補助を行うことを新たに始めた。
- ・中小企業の経営力強化のため「奥三河あきんど塾」をリアルとライブ配信で開催した。そして、その模様を一定期間、商工会のホームページから視聴できるようにした。
- ・昨年からの国の持続化給付金や国、県の支援金、協力金等を事業者を紹介・サポートし、商工会会員の半数以上が何らかの給付金等を受給できた。

(観光の現状)

- ・昨年夏ぐらいから、県境を跨いだ移動の自粛や都市部の密を避けるということから、当地のような自然を活かした、例えば乳岩峡とか板敷川のようなところには、むしろ人が集まってきて、駐車場が満車のため、路上駐車して車が溢れるといったことが起きている。

- ・今年5月に道の駅が開業した。半年間で約15万人の利用者があった。国道257号沿いで、かつては通行するのは7～8割が地元の方であったが、調査し直してみると、名古屋、西三河、浜松ナンバーの車が増えてきた。開業当初と比べると車の台数は減ったが、売上自体は伸びており、客単価はかなり上がっている。
- ・2014年度に策定した「観光交流アクションプラン」に基づき、観光交流人口100万人を目指している。これまで順調に来ていたが、コロナで茶臼山高原自体をクローズしていた時期もあり、2020年度は37万人で、前年比47%と大きく落ち込んだ。アウトドアの施設なので、天候さえ良ければ来客は見込める。山頂にウッドデッキを設けたり、リフト下に新しい品種の花を植えたりして、魅力づくりを進め、長期間楽しんでもらえる場所にしたい。

(観光・交流による地域の魅力の向上・発信)

- ・本年10月末に東京と大阪を結ぶ高速バスの唯一乗降ができる場所として、道の駅にバス停ができた。そこで、ここを観光拠点に、国の「再生・高付加価値化推進事業」の認定を受けて、高速バスと市内の観光地を結ぶ周遊バスや貸切ツアーの実証実験を行っている。
- ・NHK大河ドラマ「どうする家康」の放映を機に、市内の関連施設や長篠設楽原の戦い450周年行事とも関係づけて、県と連携しながら武将観光を進めていきたい。
- ・新城ラリーやトレイルレースなどのスポーツツーリズムや湯谷温泉の宿泊滞在時間を伸ばすためのウェルネスツーリズムを推進していく。
- ・これまで町自体は、観光については積極的ではなかったが、「観光交流の発信拠点」として道の駅を設置したことで、意識が徐々に変わってきている。過日開いた山城展も、文化財としてだけでなく、地域に足を広げてもらうという観光視点も加味した。こうした動きを、点ではなく、線となるようにしていきたい。
- ・現在建設途中の設楽ダムの見学が好評を博していて、バスツアーの目的地の一つに入れている。そのツアーでは道の駅にも立ち寄っており、産業現場を活用して観光に繋げる、地域経済に繋げるという視点も取り入れた観光の在り方を考えていきたい。
- ・新設した道の駅には、観光パンフなどが置いてあり、かなり捌けるのだが、一方でゴミもたくさん出してしまう。今は非接触という流れにもなっているので、観光情報のデジタル化を進めていきたい。
- ・「サイクリング」をキーワードに、地域の資源を活用した自転車による町巡りの仕組み作りを行うことにより、地域の経済循環を図るとともに、取組を通じて町の魅力を体験していただく「サイクリスト歓迎のまち構築事業」を実施している。
- ・コロナ禍で中央から地方への関心が集まったと言われている。奥三河には、温泉、道の駅、お祭り、茶臼山高原など様々な観光資源、施設がある。道路網も整備されてきているので、道の駅や高速道路のサービスエリアなどで奥三河の観光スポットの案内を充実させるなど、ドライブ客の奥三河周遊の促進を図っていく必要がある。
- ・コロナの影響で町内のイベントはすべて中止になってしまい、当然都市部からのお客も減っているが、一方で、町内に川遊びに来る人はものすごく増えた。そこで、実験的に、町商工会青年部が川沿いの町の所有地を活用し、ディキャンプやオートキャンプできるようにしたところ、か

りの利用者があり、来年以降も継続する考えがある。

- ・「つぐ高原グリーンパーク」はコロナ禍においても、多くの人に来ていた。地域おこし協力隊が行ったオリエンテーリングも好評であったため、そういったところとも連携し、事業者を支援できるイベントを考えていきたい。

(地域の産品のブランド力の向上)

- ・昨年、愛知県で初めて、当地のミネアサヒが、日本穀物検定協会の検定評価で特Aを取ることが出来た。これにはかなり反響があり、8月ぐらいには、去年とれた米が殆どなくなって、チャンスロスをしてしまった。今年度も特Aを取れるよう出展を予定している。
- ・農協と新城市商工会で、愛知県で唯一新城市において栽培されている山田錦という酒米から、「しんしろ関」というお酒を作っている。この「しんしろ関」をコロナ退散のお酒として、鳳来寺で祈禱、新城市を酒米の里として売り出そうと活動を始めている。
- ・「しんしろ茶」のリニューアルプロジェクトとして、「しんしろ茶」のペットボトルのリニューアルと、「しんしろ茶」の素材を使ったお菓子などの食べ物を開発し、商工会会員企業の仕事につながるような取組ができないか、専門家を交えて検討している。
- ・3か年計画で「豊根の逸品」という特産品づくりを検討している。今年度は、事業者を集めて講習会を開催した。来年以降、個別に特産品づくりを支援し、PR方法も考えていきたい。